

大坂奉行所刑事判決例十六題：近世中葉大坂地方に行はれたる刑事的法則(一)

金田, 平一郎
九州帝国大学法文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/14461>

出版情報：法政研究. 7 (1), pp.49-92, 1937-03. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



大坂奉行所刑事判決例十六題

—近世中葉大坂地方に行はれたる刑事的法則(一)—

金 田 平 一 郎

町人帯刀の罪	遺棄の罪	逃走の罪	『御仕置免制』	緒言
				目次

大坂奉行所刑事判決例十六題

—近世中葉大坂地方に行はれたる刑事的法則(一)—

緒言

我法制史研究室には、徳川前半期下半後半期上半時代(貞享乃至天明)の大坂町奉行所判決を傳ふる、古記録が可成り多く所藏されて居り(拙文、「判例近世大坂私法一斑」——中田先生還曆祝賀法制史論集所載——緒言參照)、私は既に二回に互つて、その中より數十の判決例を撰び出して世に紹介し、併せてそれ等を通して、當時大坂地方に行はれたる、私法的法則の一斑を窺つたのである(拙文、「徳川時代の大坂分散法註解」——國文學會雜誌四八卷九號——及び前掲拙文)が、更に重ねて大坂判例の紹介を試み、それ等を通して、大坂地方に行はれたる刑事的法則の一斑を、窺つて見ようと思ふのである。

尙ほ、以下に紹介する判決例を通して窺ひ得られる、徳川中期就中「公事方御定書」制定(寛保二年)後、大坂地方規律の刑事的法則は、「公事方御定書」上の原則と如何なる關係にあつたか。此點をも、併せて調査考察して置き度いと思ふのである。而してそれは、「公事方御定書」は大坂町奉行所判決の準則であつたか否か、の問題究

明の一準備でもあるのである（拙文、前掲「判例近世大」
坂私法一斑「結語參照」）。

『御仕置宥免』制

徳川幕府刑法上には、『被害者又は其親族若しくは其主人等が宥免を申出でたる場合には刑罰を輕減』すると云ふ制度が存した（中田博士、「徳川刑法の論評」
「法學志林」一八卷四號—二九頁）のであるが、大坂地方に於ても、此種制度が實施せられたこと、當時の判決例に依つて、之を實證し得られるのである。尙ほ、こゝに掲げ得られる關係判例は、盜犯の場合に關するものゝみであるが、その他の犯罪に就いても、此刑罰宥免制は行はれたものであらう（當時の法律語宥免は、本件「御仕置窺書」の一節に、「過料可申付裁之旨可相窺處數日入牢申付置候間令宥免咎之不及沙汰云々」）。

扱て、第一に掲ぐる次の天明三年の判決は、父の子の爲めにする、師の弟子の爲めにする、宥免願に基づく刑罰宥免の實例である。

第一 判決例 （諸吟味窺書寫「天明三癸卯年の分收録」）

盜賊井かたり事仕候者「御仕置窺書」土屋駿河守「去寅十二月十八日入牢無宿文藏 卯拾六歲」右文藏儀坂本町田邊屋與右衛門支配借屋多田屋伊兵衛忤ニ候處身持不行跡ニ而去寅二月十一日家出仕京都并所々ニ而米踏働等いたし罷在候得共先非を悔親伊兵衛方江立寄佗可致與存同十二月十六日夜伊兵衛方江罷越心底相

改可申候間伊兵衛手前ニ差置吳候様相敷其夜伊兵衛方ニ差留貫候内不斗惡心差發手元ニ有之候嶋毛綿壹反
同布子貳同襦袢壹晒帷子壹細帶壹筋毛綿風呂敷壹盜取逃去」右伊兵衛呼出相尋候處悴文藏立歸佗いたし候
付先々惡事等相糺候上立歸之斷等可致と其夜差留候處右品被盜取候由申之申口符合仕候^(書)」右之内嶋毛
綿並布子壹帶帷子襦袢風呂敷ハ無宿江戸の伊之助同右教相頼代錢壹貫八百文ニ賣拂貫」右伊之助右教居所
相知不申候^(朱)」右代錢遺捨候殘八百文並其余之品其儘所持罷在候由申之候得共」右所持之品取上置直積
申付候處銀九匁五分御座候尤落着之節被盜主江差遣候積御座候^(書)」右躰親伊兵衛方ニ而手元之品盜取候
段吟味之上無申披誤入候旨申之候」右伊兵衛儀文藏ハ悴之儀不便ニ存候殊盜取候内不足之分聊之品ニ付申
分等曾而無之候間御仕置有免之儀相願候旨書付差出申候^(書)」卯二月十三日入牢大屋四郎兵衛御代官所攝州
西成郡難波村禪宗黃蘗派瑞龍寺ニ元罷在候雲水僧當時無宿石苗卯廿五歲」右石苗儀爲修行去寅八月ノ瑞
龍寺ニ相勤居候處故障之儀有之難差置由ニ付當二月二日瑞龍寺罷出差當可手寄方無之長町一夜泊いたし
同十日難波村罷通候節不斗惡心差發右瑞龍寺開山堂入口明懸リ有之ニ付戸を明内江入銅轆壹流鬚壹花立壹
戸張壹銅鹽壹盜取」右被盜主瑞龍寺申口符合仕候^(書)」其儘所持罷在候由申之候得共」右品取上置直積申付
候處銀百八匁御座候尤落着之節被盜主江差遣候積御座候^(書)」右躰戸明キ懸リ有之内江入盜いたし候段吟味
之上無申披誤入候旨申之候」右瑞龍寺儀石苗ハ弟子同前ニ召仕候者之儀不便ニ存候殊被盜候品其儘相揃候上
ハ旁石苗江對無申分御仕置有免之儀相願候旨書付差出申候^(書)」^(略)」右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候

以上「卯三月」土屋駿河守「御城代戸田因幡守殿御附札卯三月十二日下ル同十八日落着」此文、藏儀

伺、之、通、大、坂、三、郷、罷、在、間、敷、旨、可、被、申、渡、候、黃紙此文、藏儀親伊兵衛方ニ而手元之品盜取候段不届ニ付入墨、敲可相伺處伊兵衛儀、文、藏、者、忤、之、儀、不、便、存、殊、盜、取、候、内、不、足、之、分、聊、之、品、付、申、分、無、之、旨、御、仕、置、宥、免、之、儀、相、願、候、間、大、坂、三、郷、罷、在、間、敷、旨、可、申、渡、哉、此、石、苗、儀、伺、之、通、脫、衣、之、上、難、波、村、并、大、坂、三、郷、罷、在、間、敷、旨、可、被、申、渡、候、

(城代)附札「同紙」此石苗儀戸明キ懸リ有之内江入盜仕候段不届ニ付脱衣之上入墨重敲可相窺處被盜主瑞龍寺儀、石、苗、ハ、弟、子、同、前、召、仕、候、も、の、之、儀、不、便、存、殊、被、盜、候、品、相、揃、有、之、上、ハ、旁、石、苗、江、對、無、申、分、旨、御、仕、置、宥、免、之、儀、相、願、候、間、脱、衣、之、上、難、波、村、並、大、坂、三、郷、罷、在、間、敷、旨、可、申、渡、哉、(略下)

次の二つの判決例は、主人の雇人の爲めにする、元主人の元雇人の爲めにする、御仕置宥免(宥恕)願例である。

第二判決例 (「諸吟味竊書寫」天明五乙巳年の分收録)

盜賊並無人別之者同家ニ差置偽之儀申立候一件「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」已明五十一月七日「小田切土佐守」已八月廿七日入牢 江戸堀五丁目八木屋八兵衛下人清七 已貳

拾貳」同日入牢 同人元下人當時無宿清兵衛已廿四歳」同日入牢 同斷當時酒井雅樂頭領分播州飭東郡東山村

百姓喜八郎方ニ當分罷在候喜六(源)已十四歳」(略中)右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」已十月「小田

切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札「此、清七、清兵衛、喜六、儀、八、兵衛、願之通御仕置宥恕申付喜六儀、東山村を

構、三人共、大坂三郷、罷在間敷旨申渡急度叱リ置損失之儀者朱書之通可被申渡候」黃紙」此清七清兵衛喜六儀行衛不知文吉申合主人八兵衛方手元ニ有之候品盜いたし其上喜六儀ハ伯父喜八郎方人別帳ニも不加同家ニ罷在呼出差紙受候節喜八郎任申忍ヒ居候段旁不届ニ付清七清兵衛ハ入墨敲申付喜六儀も同様可申付候處幼少之者ニ付非人手下ニ可申付哉之段可相伺ものニ御座候得共八兵衛義三人共幼少召仕候者之儀今更不便ニ存盜取候品不足之分ハ損失ニ相成候而も無申分由ニ而御仕置宥恕相願候間喜六儀東山村を構三人共大坂三郷ニ罷在間敷旨可申渡候哉」(略下)

第三判決例

(「諸吟味竊書寫」天明五乙巳年の分收録)

盜賊取逆盜物引請賣拂之世話仕候もの并御構之場所江立入候一件」御仕置竊書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」午○天
明六四月廿七日」小田切土佐守」(略中) 已三月十一日入牢 長町三丁目河内屋喜六同家忤熊太郎已貳拾四歳」已三月十八日入牢 無宿新助已廿四歳」已三月廿七日入牢 無宿ばいの市兵衛事嘉七已貳拾五歳」已三月廿七日入牢 無宿次郎吉已貳拾五歳」右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」已四月」(略中) 此熊太郎儀元主人藤右衛門願之通御仕置宥恕申付大坂三郷罷在間敷旨可被申渡候」(城代阿部能登守の附札) 此熊太郎儀元主人藤右衛門方表之戸明掛リ有之内江入簀戸掛ヶかねをはづし忍込致盜候段不届至極ニ付死罪可申付候哉之旨可相伺處元主人藤右衛門儀此者ハ幼少召仕候者之儀不便ニ存其上盜取候品も其儘有之候

上者申分無之由ニ而御仕置有恕相願候間大坂三郷罷在間敷旨可申渡候哉^(黄紙)此新助儀源兵衛願之通御仕置有恕申付大坂三郷罷在間敷旨可被申渡候^(城代附札)此新助儀源兵衛方ニ而手元之品取逃いたし候段不届ニ付入墨敲可申付候哉之段可相窺候處雇主源兵衛儀此者者乍當分日々相雇下人同前ニ召仕候もの之儀不便ニ存殊取逃候品其儘有之候上者無申分由ニ而御仕置有恕相願候間大坂三郷罷在間敷旨可申渡候哉^(黄紙下札)此嘉七次郎吉儀伺之通嘉七中追放次郎吉攝河兩國拂可被申付候^(城代附札)此嘉七儀ハ輕追放次郎吉儀ハ大坂三郷拂申付候身分ニ而御構之場所江立入候段不届ニ付嘉七中追放次郎吉攝河兩國拂可申付候哉^(黄紙下札)

以上例示の三判決例に依つて、大坂に於ける、少くとも徳川中期の、盜犯に關する御仕置有免制の一斑は、之を窺ひ得られるのであるが、次に、然らば大坂地方の本制度は、「公事方御定書」の原則と同一であつたか否か。

所で先づ、「公事方御定書」には、盜犯有免制を規定せる法條が存するや否や、「公事方御定書」には、此方面の一般的規定は見當らない。只その下巻第四十三條『欠落奉公人御仕置之事』の條に、關係條項を見出すのみである。即ち「享保五年」寛保元年極「一手元ニ有之品を與風取逃いたし候もの」金子ハ拾兩より以上雜物ハ代金ニ積リ拾兩位より以上ハ死罪」金子ハ拾兩より以下雜物ハ代金ニ積リ拾兩位より以上ハ死罪」金子ハ拾兩より以下雜物ハ代金ニ積リ拾兩位より以下ハ入墨敲」追加「延享二年極」但先入牢申付取逃之品價候におゐてハ拾兩以上以下共主人願之通助命申付江戸に不能在候様ニ可申渡事」享保廿一年「延享元年極」一使ニ爲持遣候品取逃いたし候もの」金子ハ壹兩より以上雜物ハ代金ニ積リ壹兩位より以上ハ死罪」金子ハ壹兩より以下雜物ハ代金ニ積リ壹兩位より以下ハ入墨敲」追加「延享元年極」但先入牢申付取逃之品價候におゐてハ壹兩以上以下共主人願

之通助命申付江戸に不罷在候様ニ可申渡事』(『徳川禁令考』後聚第「二帙七」一頁以下)是である。

扱て、右の「公事方御定書」上の規定は、奉公人の主人の物の盜取行爲に對する、主人の宥免を認める旨のものであつて、その規定の對照が限定的であるが、之に反し、前掲天明年間の大坂判決例に依つて知らるゝ通り、大坂に於ては、宥免願を認める場合が廣汎で、即ち父の子の爲めにする、師の弟子の爲めにする、主人の雇人の爲めにする、元主人の元雇人の爲めにする宥免願が、夫々認められたのである。此點に於ては、大坂の刑罰宥免制は、「公事方御定書」のそれと相異なるものであつたかの如くに見えるのであるが、しかし前示天明の三判決に於ける、宥免後の實際の處分が、いづれも『大坂三郷罷在間敷』と云ふ處分であり、一方「公事方御定書」にては『江戸に不罷在候様』と云ふ處分であつて、大坂に於ける盜犯宥免の處分と、「公事方御定書」のそれとは、少くとも同一主旨の制度であつたと云ひ得る事實を以て考ふる時、少くとも「公事方御定書」成立後の、大坂に於ける盜犯宥免制は、「公事方御定書」上の制度と同様であつたと解して、差支へないと思ふのである。

逃 走 の 罪

徳川時代に於ても、公の自由拘束力を侵害せる行爲に對し、刑事的拘束を加へる、即ち此種の行爲を處罰するのが一般であつたのであるが、今こゝに數個の關係判例を掲げて、徳川中葉時代に於ける、大坂地方の此方面の實際の一端を、窺つて見ることにしよう。

尙ほ、本節の題名を逃走の罪となせるは、その類例を今日の刑法典に就いて索むるならば、『逃走ノ罪』に該當するを以て、便宜此名を假用したに止まり、本節に述べる所が、文字通りの逃走の罪のみに止まる譯ではない。内容に相應せる題名を附するならば、『公の自由拘束力侵害の罪』とでも云ふべき所であらう。

關係判決例を紹介する前に、少くとも徳川中期大坂地方を規律せる、公の自由拘束力侵害行爲に關する、相當纏まつた罰令が存するので、先づ之を揭示して置くことにし度い。即ち「御仕置雜例拔書」の『牢を逃出手鎖を抜候者御過怠之御觸書』の條に、『一^マ牢を破逃出候科之儀只今迄ハ死罪之格ニ候ヘ共^マ牢を破逃出候は前方過怠^マ之者ハ永牢申付之永牢^マ之者遠嶋いたし遠嶋之者ハ死罪ニ可申付候併死罪可申付哉之儀ハ左様之節又可被相伺事」一宿預より欠落いたし候ハ^マ是又手鎖拔候者右之趣に准之科一段宛重く可被申付候事」一死罪に極候者^マ牢を破り逃出候歟宿預之者致欠落候歟又は手鎖拔候者不及申可爲死罪事」以上」巳五月」右之通從江戸被仰下候旨元祿十四巳六月四日被仰出候』とあるものはである。¹⁾

扱て、右の規定に見える牢獄逃走、宿預中出奔、手鎖私脱等の、公の自由拘束力侵害行爲に對する罰則⁽²⁾の、具體的適用例は、今こゝに紹介すること不可能であるが、當時の公の自由拘束力侵害行爲は前記の如きものゝみに止まらず、尙ほ他にその類例が存し、それ等に關する判決例が、可成り多く見られるので、以下にはその重なるものを掲げるのである。

- (1) 本令は京都にも實施せられたること、「京都御役所向大概覺書」に同令が見えること―「古事類苑」法律部三の二八九頁―

に依つて明らかである。

(2) 大坂方の法例集たる「諸届願出法式」の『日切中出入不相濟御斷』の條に、債務不履行に基づく『押込中他出致し候ハ、六十日手鎖被仰付候事ニ候』とあるは、同種の制規である。尙ほ此制規適用の具體例は擧げ得ない。

(一) 大坂に於ては、少くとも徳川中期時代、今日の未決拘留に該る『吟味中所預』中の者が、恣に外出する場合には處罰せられること、此種の犯行がありし場合、その拘留監視の任にある者の不注意が亦罰せられること、その犯行者居住地の庄屋、年寄等亦罰せられること、こゝに掲ぐる第四判決例に就いて、之を知ることが出来るのである。

第四判決例 (諸吟味窺書寫「天明六丙午年の分收錄」)

預ケ中不愼ニ出歩行又ハ出所不糺之品賣買いたし候一件「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」午四月十三日「小田切土佐守」去巳十一月十三日入牢午正月廿九日重病ニ付下宿所預大屋四郎兵衛御代官所攝州東成郡北平野町八丁目宇陀屋甚右衛門借屋兵庫屋吉三郎「午五拾七歳」所預ケ同所四丁目大和屋與兵衛借屋生駒屋善兵衛同家久兵衛午六拾六歳「他參届生玉神主支配地宇陀屋甚右衛門午六拾貳歳」(中)他國留右吉三郎町内庄屋庄左衛門午貳拾三歳「同斷年寄平右衛門午五拾九歳」右之者共御仕置黄紙下札を以奉窺候以上「午正月」小田切土佐守「御城代阿部能登守殿御附札」此吉三郎儀伺之通重追放申付損失之儀者朱書之通可被申付候「黄紙」此吉三郎儀無株ニ而古銅賣買いたし右吟味中所預ケニ相成候身

分ニ而身體難取續候迎番人とも油斷を考不_レ慎_ニ見_ニ世_ヲ明_ケ置_ハ又_ハ出_ハ歩_ハ行_ハ候而古手賣買いたし候段公儀を不憚儀其上藤兵衛_ハ買受候品者同人身分不相應之品ニ付盜物ニも可有之哉と怪敷乍心付欲心ニ迷ひ出所も不相尋下直ニ買取且往來之者_ハも出所不_レ糺之品買請候段古手商賣之身分ニ而ハ仲ケ間定法ニも相背旁不屈ニ付重追放可申付候哉」此久兵衛儀伺之通過料拾貫文可被申付候(城代附札)同_〇黄「此久兵衛儀預_ケ之者番人ニ被_レ相雇賃錢を貰請罷越居候上ハ晝夜共入念可申候處添番之者食事ニ罷歸候跡ニ而預_ケ之者_ハを打捨置度々等閑ニ歸宅いたし既吉三郎儀右之油斷を考見世を明_ケ古手賣買いたし又ハ出歩行候上出所不_レ糺之品買受候仕儀ニ相成候段旁不_レ埒ニ付過料拾貫文可申付候哉」此甚右衛門伺之通過料三貫文可被申付候(城代附札)同_〇黄「此甚右衛門儀吉三郎預_ケ中此もの名代ニ定番ニ相雇遣置候久兵衛儀添番之者食事ニ歸候跡ニ而預_ケ之者_ハを打捨置度々等閑ニ宿元江罷歸既右油斷を考吉三郎見世を明_ケ古手商賣いたし又者出歩行候儀を不_レ存居候段不念に付過料三貫文可申付候哉」(中略)此庄左衛門平右衛門儀伺之通庄左衛門は過料拾貫文平右衛門ハ過料五貫文可被申付候(城代附札)同_〇黄「此庄左衛門平右衛門儀吉三郎預_ケ中定番ニ罷越居候久兵衛儀添番之者食事ニ歸宅いたし右之油斷を考吉三郎儀不_レ慎ニ見世を明_ケ古手賣買いたし又ハ出歩行候を不_レ存罷在候段兼而之改方等疎之至且番人とも江之中付も不行居故之儀其上右之外先達而御差圖相濟候一件ニ而も永尋申付置候もの内證ニ而町内江立寄並先達而之殘道具を元家主九兵衛江引渡候様子不_レ存居候段是又兼而之改方疎故之儀重々不念ニ御座候間庄左衛門ハ過料拾貫文平右衛門者過料五貫文可申付候哉

扱て、此判決に見えるが如き事實を規律する規定を、「公事方御定書」に就いて索むるも、全然一致するものは見當らない。只その下巻第八十五條『牢拔手鎖外シ御構之地江立歸候もの御仕置之事』の條に見える、『同〇寛保』宿預ヶ之もの欠落いたし候ハ、本罪相當之御仕置より一等重ク可申付、及び『從前々之例』一預ヶ置候ものを取逃し候もの尋申付不尋出候ハ、過料〔徳川禁令考〕後案第（四帙一八七頁以下）の二條は、先づ同類の規定と云ふことが出来るであらう。而して今此「公事方御定書」の規定と、前示判例の判決要旨とを對照して見る時、此方面の大坂の原則と、「公事方御定書」のそれとは、少くともその根本精神に於て、同一であつたと考へて、差支へないやうに思はれるのである。

（二）以下に掲ぐるは、所謂『御構之場所』即ち刑罰として立入の自由を禁ぜられて居る土地に、立入つた場合の處罰例である。

第五判決例

〔諸御用御寢書〕寶曆四戌年乃至十辰年の分收録〕

寶曆七丑年（朱書）「盜賊方磯矢市左衛門（朱書）」立合八田五郎左衛門（朱書）「三好半切もの（朱書）」御構之場所江立入候者御仕置相親候書付「細井安藝守」井上河内守殿御附札（朱書）「伺、之通御仕置可被申付候（朱書）」丑五月十八日入牢宿なし淡路嶋四郎平當丑三拾壹歳「黃紙下ヶ札（朱書）」此四郎平儀御構之場所江立入候段不届ニ御座候間攝河兩國拂可申付哉（朱書）「右四郎平儀橋通七丁目河内屋九兵衛借屋ニ罷有淡路屋權右衛門與申候節遊所江參往來之者江口論を仕掛ヶ度とあはれ歩行茶屋商賣之妨を致し候ニ付三年前亥六月十四日入牢同十

二月三鄉拂申付候者ニ御座候所此度矢車平三郎致興行候南堀江壹丁目相撲場江罷出候ニ付召捕吟味仕候處三鄉拂ニ成候以後國々江參相撲を取渡世罷在先月下旬備後國ニ而攝州兵庫新在家町ニ居候相撲取淺尾山万之助ニ出合候得者矢車平三郎興行いたし候相撲取之内兵庫邊之もの者万之助親網屋與太夫致世話相雇候旨承候ニ付右人數之内江加江貫度存與太夫かたへ參リ頼候處相撲相濟候故當地江參リ去ル七日より相撲場江罷出候由三鄉之内ニ住居さへ不致候得者不苦儀與心得違右之通ニ御構之場所江立入候段吟味之上無申披旨申之候御池通四丁目柏屋新右衛門かしや矢車平三郎相撲頭取之内拾人「黃紙下ケ札」(朱書)此平三郎并頭取共儀四郎平事三鄉拂ニ成候ものとは不存由ニ候得共與太夫申越候儘ニ而身元をも不相糺雇候仕方不念ニ御座候間銘々江過料可申付(原書)「右之者共儀淡路嶋四郎平を雇候様子吟味仕候處頭取共世話を以相撲取相雇攝州兵庫邊之儀者同所新在家町淺尾山万之助親與太夫方江頼遣候處右四郎平儀人數名前書之内ニ有之候故一統(原流とあるは誤ならん)ニ相雇ひ候由先達而三鄉拂ニ成候儀一切不存吟味之上承り身元不相糺段不念成儀無申披旨申之候」松平遠江守領分攝州武庫郡兵庫新在家町網屋與太夫「黃紙下ケ札」(朱書)此與太夫儀四郎平申ニまかせ身元をも不相糺頭取共江口次候仕方不念ニ御座候間過料可申付哉(朱書)「右與太夫儀淡路嶋四郎平を口次候様子前條之者共同事之申口ニ而三鄉拂ニ成候儀一切不存吟味之上承り不念仕候旨申之候」右之者共御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」丑五月」細井安藝守

此寶曆七年の第五判決例は、單なる『御構之場所』立入行爲に對する處罰例である。而してそれは、「公事方御

定書」下卷前掲第八十五條中の、『従前々之例一御構之地ニ徘徊いたし候もの前之御仕置より一等重ク可申付』
（『徳川禁令考』後案
第四帙一八八頁）なる條項と合致するものである。立入と云ふことの内容は、「公事方御定書」にては、『徘徊いたし候』ことであり、大坂判例に於ても、『仕居さへ不致候得者』立入るも差支へなしと云ふものではなかつたのであり、その刑罰にあつては、「公事方御定書」は『前之御仕置より一等重ク』申付けるのであるが、大坂判決面にては亦、大坂三郷拂が攝河兩國拂と加重せられて居つて、之を要するに、此點に於ける大坂の原則と「公事方御定書」のそれとは、全く一致して居るのである。尙ほ先に掲げた第三判決例の末段に見える、『御構之場所』立入者に對する處罰が、輕追放者を中追放に、大坂三郷拂に處せられて居た者を攝河兩國拂となつて居る事例參照（後出の各判例に就いても、之を見ること出来る。尙ほ、此點に就いては「公事方御定書」下卷第百三條參照）。

又此第五判決例に依つて、此種の立入者を雇ひ入れし者及びその『口次』をなせし者は、惡意でなくとも、即ちその者が立入犯行者たることを知らずとも、尙ほ過料に處せられるものであつたことが知られるが、之又「公事方御定書」下卷前掲第八十五條中の、『追加従前々之例一追放等ニ成候儀ハ會而不存請人有之候故とくと吟味も不致店ニ差置候もの過料』（『徳川禁令考』後案第
四帙一八九頁以下）と、先づ一致するものと云ふことが出来るであらう。尤も、右の「公事方御定書」の法文と殆んど合致する判旨は、後出第十判決例に就いて、之を見ること出来るのである。

次なる第六判決例は、第五判決例と同種のものなるが、犯行者が丁内構に處せられた者であり、併せて犯行者

を立入禁止丁内に居住せしめ、『同家ニ差置』たる者を處罰せる實例たるを以て、掲げて參考に供する次第である。尙ほ、本判決に於て、丁内構に處せられたる者を『同家ニ差置』たる者を過料に處したのは、「公事方御定書」(前段に掲記せる法文の後半)と同一の原則に則れる判決と看做して、差支へないであらう。

第六判 決 例 (諸吟味窺書寫「天明五乙巳年の分收錄」)

御構在之丁内江立入候者并人別帳ニも無之他之もの差置候一件」御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」巳十月十八日」小田切土佐守」巳八月二日入牢同九月朔日重病ニ付下宿所預ケ元西高津新地壹丁目大和屋甚兵衛借屋丹波屋巳之助幼少ニ付代判德兵衛同家當時九郎右衛門町入堀播磨屋佐七借屋岩田屋三郎兵衛居宅を仕切無人別ニ而罷在候傳藏方ニ居候善次郎巳六十六歲」他參留西高津新地壹丁目大和屋甚兵衛借屋丹波屋巳之助幼少ニ付代判繼父德兵衛巳三十五歲」(中略)右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上」巳九月」小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札」此善次郎儀伺之通大坂三郷拂可被申付候」黃紙」此善次郎儀御構有之身分を不願一旦町江立入巳之助同家ニ罷在其上傳藏儀者三郎兵衛居宅之内を仕切無人別ニ而罷在候者ニ候處其儀も不存同人方江引取貰乍當分人別帳ニも不加同家いたし候段旁不届ニ付大坂三郷拂可申付候哉」此德兵衛儀伺之通過料錢三貫文可被申付候」(城代附札)「同○黃紙」此德兵衛儀巳之助幼少ニ付代判いたし居候上ハたとへ巳之助祖父ニ候とも善次郎を同家ニ差置候ハ身元得と相糺可申處無其

儀丁内御構有之ものと不存一旦善次郎を同家ニ差置候段不埒ニ付過料錢三貫文可申付候哉」(略下)
更に、同種のものをも一つ出して置かう。

第七判決例 (諸吟味窺書寫「天明六丙午年の分收録」)

盜賊并御構之場所江立入候もの「御仕置窺書」書面窺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」午四月廿三日「小田切土佐守」(中略) 同日○午四入牢 同宿 庄松午廿三歳「右之者共御仕置黄紙下札を以奉窺候以上」午四月「小田切土佐守」(中略) 此庄松儀伺之通遠嶋可被申付候(城代阿部能登守の附札) 同○黄「此庄松儀先達而盜いたし候付入墨之上重敲申付尙又追々不届有之輕追放又ハ重追放等申付候身分ニ而又候御構之場所江立入候段不届ニ付入墨之上重追放可申付候哉之段可相伺候處右體先達而一旦入墨をも申付置候者之儀ニ付遠嶋可申付候哉」(三) 次の第八判決例も亦、同種のものではあるが、『御構之場所』立入再犯の例として、こゝに紹介して置くのである。

第八判決例 (諸吟味窺書寫「天明六丙午年の分收録」)

盜賊六人并御構之場所江立入候者出所不亂之品借請又者賣拂之儀任頼ニ引受候もの共「御仕置窺書」書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候 午十二月六日「小田切土佐守」(中略) 午七月十一日入牢無宿仁太の新兵衛午貳十四歳」此者先達而盜仕候付去巳三月二日入牢同四月廿七日入墨之上重敲申付候處又候不届

有之同年七月廿八日入牢同十月廿五日輕追放申付候處又御構之場所江立入候付當三月廿三日入牢同六月五日中追放申付候者御座候^(朱)略^(中)右之者共御仕置黃紙下ヶ札を以奉窺候以上午十一月小田切土佐守^(略)此新兵衛儀伺之通重追放可申付候^(原候の下哉)城代阿部能^(登守の附札)此新兵衛儀先達而盜いたし候付入墨之上重敲申付猶又不届有之輕追放亦ハ中追放申付候身分ニ而又候御構之場所江立入候段不届ニ付重追放可申付候哉^(略下)

(四)當時に於ても、『御構之場所』に立入れる者を隠匿せる者は、刑事責任を負はねばならなかつたのである。

第九判決例 (諸吟味窺書寫「天明五乙巳年の分收録」)

盜賊并御構之者を同家ニ差置候一件「御仕置窺書書面伺之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」已三月廿三日「小田切土佐守」去辰九月廿一日入牢北渡邊町名和八郎平借屋大和屋德松同家兄佐助事喜八已二十三歳「所預ヶ右喜八同家主大和屋德松已二十歳」右德松家主名和八郎平已二十八歳「右八郎平儀丁内年寄役相勤候ものニ御座候^(朱)五人組榎並屋次郎兵衛已六十五歳同堺屋德右衛門已四十八歳」同金田屋佐兵衛已五十二歳「同馬場良適已四十七歳」右之者共御仕置黃紙下札を以奉窺候以上已二月「小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札「此喜八儀伺之通死罪申付償等之儀ハ朱書之通申付伊三郎儀急度叱リ置可被申候」黃紙「此喜八儀先達而盜仕候付大坂三郷ニ罷在聞敷旨申渡又ハ敵入墨等申付候身分ニ而三郷江立入罷在其上

又候町家見世先并芝居見物人傍ニ有之候品其外表之戸明掛リ有之内江入或ハ裏手之垣を押破表之戸かけかね等をはつし内江入盜仕候段不届至極ニ付死罪可申付候哉〔此德松儀伺之通所拂可被申付候〕〔城代〕〔同紙〕〔黄〕
此德松儀兄喜ハ先達而大坂三郷ニ罷在間敷旨申渡置候身分之儀乍存同人無據相頼候迎御構有之ものを隠し同家ニ差置候段不埒ニ付所拂可申付候哉〔此八郎平伺之通過料三貫文申付次郎兵衛德右衛門佐兵衛良適ハ急度叱リ置可被申候〕〔城代〕〔同紙〕〔黄〕
此八郎平并組合次郎兵衛德右衛門佐兵衛良適大坂三郷ニ罷在間敷旨申渡候もの町内同家人別ニ加リ居候儀不存罷在候段兼而之改方不念ニ付八郎平過料三貫文申付次郎兵衛德右衛門佐兵衛良適ハ急度叱リ置可申候哉

此判例は、『御構之場所』へ立入れる者を隠匿せる者は、所拂の刑と云ふ宣告であるが、之は「公事方御定書」下巻前掲第八十五條の、『延享二年極』一御構有之ものを隠し差置候もの』追放ものを隠置候は、江戸拂」江戸拂之ものを隠置候ハ、所拂』の原則と同一原則が、少くとも徳川中期、大坂地方に行はれたることを示すものであらう。

又本判決に依つて、此種の隠匿行爲者の家主及び組合の者亦、一定の刑事責任を負はねばならなかつたことが判るのである。

次の判決面に於ける、つやなる者及び三田屋善兵衛なる者の行爲亦、此種の隠匿行爲に類するものであらう。

第十判決例 〔御吟味物料書并御伺書控〔收録〕〕

延享元子年〔朱〕書」掛り役人田中宇左衛門小川多源次」重キ追放之者構之場所江立歸候一件」御仕置窺書」子

八月「佐々美濃守」宿なし藤兵衛儀前名平野屋彌兵衛與申三年以前戌年迄神崎町ニ罷在候處同年三月攝州東生郡鴨野村百姓八郎兵衛忤仁兵衛ニ手疵負候ニ付河内守掛リニ而一件吟味仕候上彌兵衛儀重キ追放申付置候處去年以來當地江立歸リ當一月迄吉原町京屋伊兵衛支配之借屋ニ住居いたし其上五月十夜南本町羽根屋孫兵衛方江參リ離別之女房ニ逢せ候様重高を申懸ケ又は自害いたし可相果忤と申騒シ居候旨孫兵衛并町人共訴出ニ付召寄入牢申付一件吟味之趣左之通御座候_子五月十一日入牢宿なし藤兵衛當子四拾五歳_朱黃御下ケ札寫_書「此者構之場所江立歸致仕居剩度銀錢爲可貪取工ニ成ねたり事を申掛ケ重ニ不届至極ニ付死罪可申付載_書」御城代堀田相模守殿御附ケ札寫「伺之通死罪ニ可被申付候」生所播州加西郡荒井山妙樂寺村百姓太郎兵衛忤ニ而父母共相果拾壹歳之節_朱當地江罷越所_朱町奉公仕拾貳三年程以前_朱神崎町明石屋喜右衛門借屋ニ而大工職仕居候處三年以前重キ追放ニ相成候以後播州高砂江罷越日雇働いたし居候得共渡世ニ成候程之儀無之ニ付去年十月_朱當地江立歸リ右京屋伊兵衛支配之借屋家名不存善兵衛儀前方_朱致懇意此者挨拶ニ而同借屋借リ請女房つや義其節は致奉公居候故暇取せ一所ニ相成日雇働いたし居候由借宅借リ候節之世話人外ニも可有之旨相尋候處善兵衛斗ニ而家主家請人杯江も追放者と申儀隨分隱シ居宅借リ請候得共薄ニ存候者も有之趣ニ付女房は致離別二月末比借リ宅相仕廻播州江罷越三月末比ニ而も可有之哉又ニ立歸りつや姉_朱聶右羽根屋孫兵衛方江參つや居所之儀相尋逢せ吳候様ニ申候處一旦離別いたし候事ニ候得ハ居所申聞候儀ハ難成旨申ニ付度_朱罷越彼は申争候處瓦町川崎屋吉兵衛道修町川崎屋和助豊後町山城屋五郎右衛門挨拶ニ入

鳥目貳貫文吳候ニ付「川崎屋吉兵衛川崎屋和助事紙屋四郎兵衛山城屋五郎右衛門呼出藤兵衛ハ追放者と申儀存居候哉と相尋候處會而不存孫兵衛とハ近付ニ候故若重高ニ成候而ハ如何と存事濟候様ニいたし遣度挨拶仕候上鳥目貳貫文孫兵衛請取藤兵衛江相渡候迄之由申之候^(朱書)」右錢ニ而衣調坊主ニ相成り播州江罷越候由兎角暮し方無之ニ付又々立歸り長町旅籠屋ニ一夜泊り致シ居候得共渡世無之ニ付孫兵衛江身分儀申聞合力をも可請と存五月十日之夜孫兵衛方江参りつや居所之儀尋逢ヤ吳候得と申掛ケ候處孫兵衛儀逢不申家内之者も不取敢ニ付可相果段申聞所持之小刀ニ而腹ニ引疵を付ケ彼是申騒し候畢竟前方も重高を申懸ケ其節挨拶人有之鳥目をも貰候事故此度も身分難立行候ニ付又候孫兵衛方江罷越女房を戻し候得と重高ニ申懸ケ身分難立行候故相果候杯と申少し斗疵をも付候ハ、孫兵衛儀事やかましく存又々錢をも吳可申哉と不斗存付候由構之場所江立歸り其上鳥目を爲可貪取一旦離別仕候女房ニ逢サ候得と申懸ケ又は可致自害杯と申威し候義吟味之上無申披旨申之候」南本町三丁目近江屋次郎兵衛借屋羽根屋孫兵衛當子四拾八歳」黃紙御下ケ札寫^(朱書)「無構旨可申渡哉^(朱書)」御附札寫「伺之通無構」宿なし藤兵衛儀孫兵衛方江罷越候様子吟味仕候處藤兵衛儀神崎町ニ居候内つやを女房ニ仕一所ニ居候由及承候得共出合候儀一切無之當二月つや儀藤兵衛と縁絶いたし暇狀をも取候由ニ而罷越候ニ付世話いたし奉公ニ遣し置候處翌月藤兵衛儀孫兵衛方へ参りつや居所を尋戻し候得と申懸ケ其後も毎度重高ニ申騒し候ニ付可願出哉と存候得共川崎屋吉兵衛川崎屋和助山城屋五郎右衛門挨拶ニ入吳候ニ付鳥目參貫文差遣し候處孫兵衛留守之内江又々罷越離縁之女房を

戻し候得と重商ニ申小刀を持家内之ものを威し候上如何いたし候存念ニ候哉自害いたし候由ニ而少し斗疵を付臥シ居候所江孫兵衛歸り藤兵衛存念をも可尋と存候得共其儘小刀を持居候ニ付恐敷存早速町人共江相知セ訴出候右之通ニ而毎度罷越重高成儀申懸ケ令迷惑候間以後右躰之儀無之様ニ相願候旨申之候」右羽根屋孫兵衛同家しゆん當子六拾五歳」黃紙御下ケ札寫(朱書)「無構旨可申渡哉(朱書)」御附ケ札寫「伺之通無構」此者夫大和屋太右衛門儀拾年程以前立賣堀吹田屋又兵衛借屋ニ居候處病死いたし娘兩人有之壹人は孫兵衛方江縁付致させ妹つやハ所々町奉公致させ置しゆん儀は神田町ニ獨身ニ而罷在候得共當五月ハは孫兵衛方へ同家ニ成候由つや儀奉公勤居候内平野屋彌兵衛女房ニ相成候筈ニ約束いたし候旨申聞未引取内孫兵衛追放ニ成候由及承候處彌兵衛儀藤兵衛と名改吉原町ニ借宅いたしつやも一所ニ居候由ニ而折節參候得共不埒成ル藤兵衛と夫婦ニ成居候事ニ候得は參候儀無用ニ致し候得と申聞不致通路候處當二月つや儀藤兵衛と離縁いたし暇狀を取罷越候故孫兵衛を頼奉公ニ出し置候由藤兵衛儀孫兵衛方江罷越候様子孫兵衛申口之通ニ而度々重高成ル義申懸ケ令難儀候間以後右躰之義無之様相願候旨申之候」右羽根屋孫兵衛方ニ居候つや當子貳拾貳歳」黃紙御下ケ札寫(朱書)「此者構之場所不存罷在候由追放と承候得は其段承糺右場所ニ夫居候ハ、異見をも可加之處無其儀不念之至リニ候併女之儀無辨夫中ニ任せ不相糺義故急度叱置可申哉(朱書)」御附札寫「離縁いたし候者之儀候間一通り叱リ可被申候」此者宿なし藤兵衛儀平野屋孫兵衛と申節女房ニ相成候筈ニ約束いたし候様子并吉原町ニ而藤兵衛と一所ニ成居候處當二月離縁いたし候趣しゆん申口之通ニ而

其後町奉公いたし居候由申候藤兵衛儀追放之者ニ而當地ニ致住居候事ハ難成者ニ候得は構之場ニ而無之所江參候得と幾重ニも可致異見處無其儀吉原町ニ一所ニ相成居候段吟味仕候處追放と申儀ハ承候得共何方ニ居候事を構之場所と申候哉其譯をも藤兵衛不申聞ニ付不存吉原町ニ而借屋借り置候由藤兵衛申參候ニ付構之所ニ而ハ無之事と存夫ニ隨ひ一所ニ罷在候旨申之ニ所預ケ吉原町播磨屋むめ代判京屋伊兵衛當子三拾四歳「黃紙御下ケ札寫^(書)」此者追放ものむめ借家ニ居候儀追放ものと不存差置候段不吟味之仕方不念ニ付過料五貫文可申付哉^(書)「御附ケ札寫」伺之通過料五貫文可被申付候」此者支配之借屋ニ宿なし藤兵衛を差置候節其儀吟味仕候處右むめ親吉兵衛儀去年十一月病死いたし伊兵衛儀永々吉兵衛借屋ニ罷在惡意ニ仕來候ニ付吉兵衛死後むめ代判之儀被相頼借屋支配仕候事ニ而藤兵衛儀は吉兵衛存生之内々借屋ニ差置候故追放者と申儀曾而不存吉兵衛存生ニ如何相對いたし借屋借シ遣候哉様子不存事ニ候得共吉兵衛死後むめ借屋申引請致支配候儀ニ候得は猶又相改不埒之者は差置間敷事ニ候處追放之もの借屋内ニ住居いたし候を不存罷在候段不念之儀無申披旨申之候」子八月三日入牢右京屋伊兵衛支配之借屋三田屋善兵衛當子三拾五歳「黃紙御下ケ札寫^(書)」此者前方あばれ又ハ盜仕此度も追放ものと不存藤兵衛居宅之儀致世話候段不届ニ付藤兵衛同罪ニも可相伺者ニ候得共四年以前被仰出候追放者と乍存圍置候歟又ハ致世話候もの之御仕置之儀町觸仕候節ハ江戸下リニ雇レ當表之觸不承由ニ候乍去追放者と乍存家主へ無構者之由偽りを申世話仕候故藤兵衛立歸り住居仕候事ニ而重々不届ニ付見こりのため三日肆之上遠嶋可申付哉^(書)「白紙小札寫^(書)」此三日肆

と申儀當表ニ而前々致來ニ御座候町中引廻し杯々は大勢其科を存甚見こりニ宜御座候^(朱)「御附札寫」伺之、通三日晒遠嶋可被申付候」生所攝州尼崎築地町家主不存三田屋七兵衛忤母相果父存命善兵衛儀拾五日程以前^ガ當地江罷出奉公仕其後暫之内玉造鐘木町和泉屋三郎兵衛方ニ居候得共不和ニ而家出仕宿なしニ罷成土の徳兵衛と申節拾年以前卯六月玉造ニ而あはれ候ニ付入牢同年十一月出牢申付又々宿なしニ而罷在候處盜仕候ニ付七年以前午正月入牢同年三月敲放ニ相成宿なしニ而所々江日雇ニ參又は旅杯江罷越渡世仕三年以前戌八九月比ニ而も可有之哉渡邊民部御代官所攝州高津新地大和屋伊兵衛借屋借り請茶屋商賣いたし居候處又々盜仕同年十月入牢翌亥四月重キ敲放ニ申付出牢以後唯今之借屋江罷越候由宿なし藤兵衛居宅借り請候節之仕形吟味仕候處藤兵衛とは前方々懇意ニいたし三年以前追放ニ成候様子も及承居候由去年十月比ニ而も可有之哉藤兵衛罷越播磨屋吉兵衛借屋を借り請候筈ニ家主と相對いたし置候若家主が相尋候ハ、宜挨拶いたし吳候得と無據頼參二三日過家主吉兵衛儀藤兵衛身元之儀尋ニ參候故何之構も無之者ニ候間借屋ニ差置遣し候得と申聞候迄之由追放者乍存致セ話候者御仕置之儀四年以前觸知セ候處藤兵衛居宅借り候節構無之者と家主江偽り申聞候は銀子ニ而も可貪ため之儀と吟味仕候處四年以前ニハ當地ニ而自分之居宅無之江戶表江罷越當地觸之様子不存勿論銀子等食候儀無之候得共追放者と乍存致世話候仕形吟味之上無申披旨申之候」吉原町年寄堺屋伊左衛門當子四拾六歳^(朱)「黃紙御下ケ札寫」此者追放者町内ニ居候を不存罷在候段不念ニ付過料五貫文可申付哉^(朱)「御附札寫」伺之通過料五貫文可被申付候」此者年寄役相勤候事ニ候得

は毎度相改町内ニ不埒之者差置間敷處京屋伊兵衛支配之借屋ニ追放者居候を其通ニいたし置候儀吟味仕候處不埒之者ハ不差置様ニ隨分改來候處右借屋ニ追放もの住居いたし候を曾而不存罷在此段不念之儀無申披旨申之候」所預ケ阿波橋町板屋喜左衛門當子三拾貳歲」黃紙御下々札寫」此者藤兵衛家主むめ亡父吉兵衛賴候ニまかせ請判仕候由追放ものと申事不存由ニ候得共兼而申付置候掟を相背下請不取請人ニ相立候段不埒ニ付家請人之仲ケ間はつし過料五貫文可申付哉^書御附ケ札寫」伺之通家請人之仲ケ間外シ過料五貫文可被申付候」此者先年吟味之上大坂借屋請人差免置候五拾貳人之内ニ御座候宿なし藤兵衛儀吉原町播磨屋むめ代判京屋伊兵衛支配之借屋ニ居候節之家請人ニ付吟味仕候處むめ親吉兵衛とは兼而致懇意ニ候處去年八九月比ニ而も可有之哉播磨屋藤兵衛と申者吉兵衛借屋ニ差置候間家請人ニ相立候得と申聞候ニ付請判仕候迄ニ而追放者と申儀曾而不存旨申ニ付下請人之儀相尋候處家主吉兵衛儀慥成者」と此下請人と申義は都而家請ニ立候儀借屋人之身元慥成ル者と請合ニ相立候事ニ候處請判一通り之様ニ存借屋人身分ノ之儀ニ而出入有之節家請人共引請候事を難儀之旨ニ而是迄毎度願出候類有之ニ付家請人ニ立候節ハ借屋人之身元疾と相糺下請人を取置候上請判いたし候様ニ先達而申付置候^書噂仕候ニ付下請も不取置致請判候由追放者と申儀ハ不存候得共兼而申付置候儀を相背下請不取置家主申ニ任セ身元を不糺追放者之家請人ニ相立候段吟味之上無申被旨申之候」右八人御仕置黃紙附札を以奉伺候以上」子八月」佐々美濃守

遺 棄 の 罪

徳川時代に於ても、扶助を要すべき者を遺棄した者は、一定の刑事責任を負はねばならないと云ふ原則が、一般的に行はれたのである。

以下、徳川中期大坂地方に行はれたる、此方面の原則を、判例を通して窺つて見ることにしよう。

(一) 大坂地方にては早くより、捨子に關する罰令及びその養育等に關する制令が、屢々發せられて居る〔大坂第三、九九、一一四、一一五、一一七、一二二、一三二、八三一、一二七四頁等々參照〕所から、此地方には、捨子の風習が相當流行して居たらしく思へるのである〔當時捨子に關する處置が繁雜嚴重を極めたこと―註(3)參照―その一證左とならう〕。

擬て先づ、捨子に關する判例として、次の三判決を掲げ、捨子の罪に關する、當時の制規の一端を窺つて見ることにしよう。

第十一判決例 〔御吟味物料書并御伺書控〔收録〕〕

寛保元酉年〔朱書〕掛り役人山本長右衛門田中宇左衛門〔朱書〕捨子一件「御仕置窺」酉十二月「掛り佐々美濃守松浦河内守」水野河内守知行所河州丹南郡田中新田百姓源兵衛持地ニ當十月廿六日之夜當歲之男子捨在之右村ニ養育いたし置候處此捨子ハ其以前秋元越中守領分同國同郡高松村庄屋平左衛門門前ニ捨在之を田中新

田江捨替候由田中新田源兵衛訴出吟味仕候内右捨子は同領同國八上郡金田村百姓九郎兵衛借屋淨念捨候由
相聞候ニ付召捕一件吟味之趣左之通御座候「酉十二月七日入牢河州金田村百姓九郎兵衛借屋淨念當酉六十三歳」
黄紙御下ケ札寫^朱「此者九百文之錢貪可取ため堺江養子ニ遣候由偽り忤を引取捨候段不届至極ニ候捨子仕
候もの度々有之不届ニ候近來捨子いたし候者御仕置當御役所ニ而例格無御座候得共右躰之者見こりのため
死罪右村於向寄獄門ニ可申付哉^朱」御城代酒井雅樂頭殿御附ケ札寫「死罪其居村於向寄獄門可被申付候」生
所河州天野山百姓長九郎忤父母共相果妻子へ金田村九郎兵衛借屋ニ差置自分は所々百姓方ニ致奉公居候而去
申十二月々妻子と一所ニ成當二月致剃髮^テ託鉢渡世仕候處當十月廿日過同村百姓庄兵衛忤惣兵衛申聞候は別
宅ニ差置候妾腹ニ男子出生候得共親共初々村中江披露難致候何方江成共養子ニ遣度間肝煎吳候様ニ相頼候ニ
付銀子差添候哉と尋候所爲目九百文可相濟遺旨申ニ付聞合可申と挨拶いたし罷歸候得共所詮九百文斗差添
候而は養ひ候者有之間敷と存右忤引取候而何方江成共捨九百文之錢徳用ニ可致と不斗存付十月廿六日暮過
惣兵衛妾方江參右之忤堺ニ養度與申者有之候間遣候様ニ申偽錢九百文請取忤抱出候處近所江捨候ハ、相知
可申と存居村々三十丁斗隔候同領同國高松村庄屋平左衛門門前江捨置右錢は遣ひ捨候由畢竟身貧ニ而渡世
無之ニ付九百文之錢徳用ニ可致ため堺江肝煎候由申偽捨子仕候段吟味之上無申披旨申之候「一右之通徳用
可取ため外江肝煎候由偽り捨子いたし候上は是迄も右躰之仕形ニ而捨子いたし候儀度々有之旨吟味仕候處
去十二月迄ハ所々奉公いたし居候事故養子肝煎忤仕候儀會而無之旨申之候」河州高松村庄屋平左衛門當酉

四十九歳「黄紙御下札寫^(朱)」此者居宅門前ニ捨子^(書)在之田中新田江捨替候節は大坂江罷出居候故捨替候儀ニハ不携候得共日比申付疎故右躰之儀在之其上吟味之節不取留風聞迄之儀を田中新田ニ捨候事之由申之大坂ニ罷歸翌日ニ而も疾與相糺可置處無其儀旁不念ニ付過料可申付哉^(朱)「御附ケ札寫」過料可被申付候」當十月廿六日之夜居宅門前ニ捨子有之候を同村五郎兵衛儀番非人六助ニ申付同國同郡田中新田源兵衛持地江捨させ候由相聞候處元來右捨子は田中新田ニ捨候故捨戻させ候旨申之及吟味候内金田村淨念儀平左衛門門前江捨置候儀無相違旨及白狀候ニ付田中新田ニ捨候と申儀は無之處如何いたし田中新田ニ捨候様ニ申居候哉と吟味仕候處當十月廿六日ニは地頭用ニ而大坂江出翌廿七日歸候處右之捨子田中新田ニ捨候ニ付捨戻候旨風聞有之故其通之儀と存田中新田ニ捨候由申居候風聞迄ニ而不取留儀ニ候處田中新田ニ捨候様ニ申之候段吟味之上無申披旨申之候」河洲高松村五郎兵衛^(書)「黄紙御下ケ札寫^(朱)」此者村中ニ而申付候者茂不覺平左衛門門前之捨子を他村江捨替させ候儀は兼而村中^(書)之あるき働いたし候故村之者共申付候儀ニ候得は其通之事と相心得何之無差別六助ニ申付捨替させ候儀と相聞候假令村中^(書)之もの共申付候事ニ候共不埒之義ニ候ハハ斷も可申處無其儀捨替させ候段不埒ニ付あるき役取上可申哉^(朱)「御附ケ札寫」あるき役取上可被申付候」當十月廿六日之夜同村庄屋平左衛門門前ニ捨子有之候を番非人六助ニ申付田中新田江捨させ候儀吟味仕候處五郎兵衛は村之步行働渡世候處廿六日之夜四ツ時過居宅之表ニ呼候ニ付出候得は平左衛門門前ニ捨子有之村之者共大勢集居候而右之捨子何方江成共遣候様ニ申ニ付番非人六助ニ申付田中新田江捨替させ

候旨申ニ付何方江成共遣候様ニ申付候者は誰ニ候哉與吟味仕候處夜中之儀大勢集リ居候内ガ申候儀ニ候得は誰と申儀は覺不申候得共歩行渡世之者故村中之儀ニ候得ハ其通之事與存何之無差別直ニ六助ニ申付遣候由捨子を又々捨替候儀は不埒之事ニ候處外村江捨させ候義吟味之上無申披旨之申候河州高松村番非人六助當酉四十八歳黄紙御下ケ札寫(書朱)此者番非人之事故五郎兵衛申ニまかせ捨子捨替候由申之候得共不埒之儀ニ候ハ、假令村中之もの申付候共斷可申處無其儀捨ニ參候段不埒ニ付右村之番人相止させ可申哉(書朱)御附ケ札寫高松村番人相止させ可被申候當十月廿六日之夜村中相廻リ候處庄屋平左衛門門前ニ捨子有之村中大勢集リ居候而同村五郎兵衛申候は右捨子田中新田之方江遣候様ニ申ニ付無何心持參候而捨置候由番人之儀ニ候得は村之者申付事故其通之儀與存何之無辨捨替候段吟味之上無申披旨申之候河州金田村庄兵衛忤惣兵衛當酉貳拾壹歳黄紙御下ケ札寫(書朱)此者無構候捨子之實父ニ候間相渡末々宜取斗せ候様ニ可申渡哉(書朱)御附ケ札寫構無之捨子實父ニ候付厚ク可致養育旨可被申付候別宅ニ差置候姿あき當十月廿一日出產男子出生候處親共初村中江も隠候儀故何方江成共養子遣吳候様ニ同村淨念江相頼候處堺ニ養度與申者有之由申ニ付錢九百文差添右忤淨念江相渡彌堺江遣候儀と存居候處淨念儀右之錢取込忤ハ高松村江捨候由吟味之節初而承候養子ニ遣候ハ、養先をも疾與可承置處村中江隠候事故淨念申ニまかせ不取敢忤相渡不念ニ存候旨申之候右御仕置黄紙付札を以奉窺候以上酉十二月掛り佐々美濃守松浦河内守右一件翌戌五月廿一日落着申渡(書朱)

第十二判決例 (諸御吟味落着書留「收録」)

○延
 辰_享五月廿二日吟味同十一月朔日落着「一捨子一件」當十月十九日夜鑪屋町吉田屋利助門内ニ貳歲斗之
 男子捨有之懷中ニ大和屋幸助與認候封書有之由所之者訴出候處右捨子ハ京都寺町通阿彌陀寺前横町松木屋
 丈右衛門借屋伏見屋次兵衛實子與惣五郎ニ申者ニ而養育銀六拾四匁五分相添幸助方江養子ニ致し候を捨置
 候趣ニ相聞候ニ付捨子ハ當分利助方ニ而養育致させ置幸助召捕入牢申付遂吟味酒井讃岐守殿江相窺候上御
 仕置申渡覺」辰十月廿六日入牢宿なし大和屋幸助」右幸助儀養育銀を以借宅を茂可致積リニ候段與惣五郎實
 父次兵衛江申聞養子ニ致し銀子遣捨候上與惣五郎を捨置候仕方不屈之至ニ付死罪御仕置ニも可申付處最初
 ハ與惣五郎を守り立候積リニ而養子ニ貫候得共借宅致し候儀及延引候内銀子不殘遣捨無是非見捨候儀ニ而
 親類共ニ久離者被切候得共吉田屋利助儀は幸助甥之夏故與惣五郎を次兵衛方江指戻し吳候様ニこの書付を
 相添捨置候段ハ乍不屈茂與惣五郎を相勞り候志茂有之強而工候筋共不相聞ニ付一統輕く遠嶋申付候事」口
 書掛リ八田五郎左衛門牧野金左衛門

右の寛保元年の第十一判決に依つて、利欲の爲めに他人の小兒を引き取り、之を遺棄せる者は死罪獄門の刑に
 處せられると云ふのが、大坂方の原則であつたことが知られる。而して此原則は、後世迄行はれたものではあるま
 いか。果して然りとすれば、此原則と、寛保二年に成れる「公事方御定書」の原則との關係は如何。「公事方御

定書」には、之に該當する規定は見當らないが、その下巻第四十五條『捨子之儀ニ付御仕置之事』の條に、『從前々之例』一金子を添捨子を貰其子を捨候もの』引廻之上獄門』〔徳川禁令考〔後案〕第二帙七五七頁〕なる規定が存するので、大坂も江戸も、少くとも「公事方御定書」成立後は、此點に關して、先づ同様の原則に規律せられて居たと云ふことは出来るであらう。

以上と反對に、小兒を遺棄したとは云へ、それが利欲の爲めの計畫的行爲でないならば、遠嶋刑に處せられるに止まつたこと、第十二判決例に就いて、之を知ることが出来るであらう。

次に、當時捨子があつた場合には、一定の者が之に保護を加へ、一定の處置を構すべき定めであつたのであるが、此義務に違反して、當該捨子を更に捨てた場合即ち『捨替』せる場合には、一定の者又一定の刑事責任を負はねばならなかつたこと、又寛保元年の第十一判決例に依つて之を知ることが出来る。此原則は、「公事方御定書」で云ふならば、その下巻前掲第四十五條中の、『寛保二年極』一捨子有之を内證にて隣町等江又候捨候儀顯におゐてハ」當人所拂」家主過料」五人組過料」名主江戸拂」但吟味之上名主五人組家主等不存儀無紛候ハ、無構』〔徳川禁令考〔後案〕第二帙七五七頁以下〕であるが、寛保元年の大坂判例と、寛保二年に成れる「公事方御定書」の規定とを比較照合して見る時、爾後に於ける大坂、江戸の此方面の原則は亦、先づ同様であつたと推測せられはしまいか。

捨子があつた場合には、一定の者が一應之を保護し、然る後更めて養育者（養親）を決定するのであるが、その場合には、少くとも官廳にその旨を届出でることを、法律上必要とせられたのである。⁽³⁾その軒下に捨子せられ

た家の家守源兵衛が、その捨子の保護中、無斷捨子を他に養育せしめた爲めに、處罰せられて居る次の判決例は、右の原則の適用例である。

第十三判決例 (諸御吟味落着書留「收録」)

已〇寛延三月十八日吟味同五月十九日落着「一捨子無斷無宿之者江爲養候一件」橘通三丁目大津屋九兵衛家守住吉屋源兵衛支配之借屋軒下ニ當三月八日之夜當歳之男子捨有之段翌九日源兵衛并年寄町人共訴出ニ付致養育置候而貰手有之節可斷來旨申渡置候處右捨子南堀江壹丁目和泉屋四郎兵衛借屋津輕屋清八母ミや口次を以同所網干屋源兵衛借屋萬屋庄兵衛同家松屋彦兵衛夫婦之者江當分預ケ置候處右兩人共捨子を連行衛不知旨同十七日源兵衛ニ年寄町人付添申出ニ付一通り様子相尋候處捨子預ケ方紛敷相聞江候故源兵衛並ミや所江預ケ彦兵衛夫婦者南堀江四丁目町人共江尋申付置候處同月廿一日彦兵衛夫婦并右捨子召連右町丁人共罷出ニ付遂吟味候處源兵衛義實者ミや口次を以養料錢三貫五百文指添捨子彦兵衛夫婦之者江爲養ミや江茂爲世話料鳥目貳百文遣候義ニ而彦兵衛江當分預ケ置候様ニ申出候儀者全心得違之旨申之彦兵衛并てう儀者當時指定リ候宿無之故養料を以借屋借リ請可申積ニ而右捨子源兵衛ハ貰請候儀無相違候得共右錢高に者少不足ニ付京都知邊之者ハ請取候銀子有之故右爲催促同月十六日彼地江登リ同十五日罷下リ候儀ニ而右捨子龜抹ニ可致所存毛頭參之旨申之勿論右當人共庄兵衛同家ニ而も無之當前無宿之儀ニ付小屋預ケ申付猶又一

件遂吟味候上左之通落着申渡ス」一右源兵衛儀、貴人有之迄、養育申付置候、捨子無斷無宿、彦兵衛夫婦之者江爲養、其上右兩人行衛不相知由訴出候節、當分預ヶ置候様ニ申なし候段、旁不埒之至ニ付重キ咎ヲモ可申付候得共彦兵衛儀妻ニ乳有之養料を以身上ニ取付度旨相頼幸之義與一圖ニ存込無何心捨子遣候由吟味之上申口無相違相聞強而工ニ候筋茂無之ニ付令用捨戸ノ申付候、一右彦兵衛てう儀宿なし之身分ニ而捨子貴請候儀不埒之事ニ候得共てう儀乳茂有之間養料を以借宅を茂致し勿論成人之後介抱等請度段不斗心付キ貴候迄にて吟味之上指而不實之仕形共不相聞其上一端貴請候養料指添右捨子吟味中橋通三丁目町人共迄相返シ候、付令用捨門前拂申付候事」一右ミヤ儀無宿之者江口次致し捨子爲養世話料貴候段不埒之儀ニ候得共最初本人共を引合候迄ニ而畢竟女之儀無辦仕形ニ付令用捨無構預ヶ指免候儀貴請候鳥目早源兵衛江可指返候尤ミヤ儀諸奉公人口入令渡世、一候得者以來共不筋之仕形無之様ニ別而可相愼旨申渡候、一町年寄貝塚屋藤兵衛并住吉屋源兵衛五人組河内屋伊兵衛金屋嘉右衛門播磨屋太右衛門儀右捨子他江遣候段源兵衛より不知セ由申立候得共最初訴候節貴人在之者可斷出旨一統ニ申渡置候、一候得共隨分心を付、兎略ニ無之様取斗可申所今更不存との申分ヶ難相立就中茂兵衛儀者年寄役をも乍勤不行届仕形不念之至ニ付吃度可令沙汰候得共彦兵衛江捨子遣候以後未日間茂無之、一候故令用捨遣候條先達而渡置候、捨子其儘養置追而慥成ル養人有之者得與入念請人取之可申出旨申渡候、一口書掛リ八田伴右衛門阿部右平太

(3)

年號記載なき爲め、果して嚴密に徳川中期の制度そのまゝを傳ふるや否やは明らかでないが、少くともその概要に於ては大坂奉行所刑事判決例十六題

同様のものと思はれる、捨子の處置に關する制規が存するので、左に掲げて參考に資し度い。「諸屑願出法式」の『捨子帳之事』の條に、『一捨子有之旨訴來候得者何時見合候哉子ニ病者無之哉與相尋右捨子者其町ニ養爲置遣而貫人有之者請人取之候而可斷出旨申渡其趣書留可致候事』但し捨子致候者其手筋知れ可申様子ニ候得は不懸吟味事』一右捨子貰度與申者有之遣度旨貫人並請人召連斷出候得者聞届末ニ龜抹無之様可致旨申渡其趣書込爲致候事』但し請人召連出候得者貫人不罷出候而も聞届遣候事』一御城近邊ニ捨子有之趣御城代御定番々斷有之候歟其外御役屋敷前ニ捨子有之地役人衆々斷有之節者當番同心爲立會人足差添爲受取候上方角之惣旨所江差遣養育爲致貫人有次第請人取之可斷出由當番惣代江申渡其旨書留爲置候事』但し捨子有之旨御城代が申來時者此方組斗當番同心兩人差遣早々爲請取可申事』一右捨子貫人有之請人取之養育銀何程相添遣シ度旨惣代共書付を以相伺候節者貫人請人召連爲出聞届末ニ龜抹無之様申含右養育銀差遣し候様申渡其趣書込爲致候事』一番所近邊ニ捨子有之旨下宿之者斷出候節者下宿ニ而爲致養育置貫人有之次第可訴出段申渡其趣書込爲致候事』但人有之請人取之斷出候ハ、聞届末ニ龜抹ニ不致様申渡養育銀者拂捨銀之内可遣旨當番惣代江申渡其趣書込爲致候事』但シ養育銀古來者四ツ寶銀百五拾目差遣候由其積を以當時者文字銀三十拾七匁五分差遣候事』及び『捨子斷』の條及び『同貫人有ニ付斷』の條に見える、左の如き書式がそれである。『乍恐口上』一當月幾日何時當村何兵衛軒下ニ當年出生と相見江候女子捨御座候を見付早速取入介抱仕置候尤身之内疵等無御座候ニ付乍恐此段御斷奉申上候以上』『乍恐口上』一先月幾日夜何時當村何兵衛軒下ニ何年何月出生之書付相添何才之男子捨御座候を見付早速取入介抱仕御斷奉申上候然處此度何村誰某與申者右捨子貰請度段申出候ニ付篤與身許相糺候處日頃實跡之者ニ御座候由隨而一子有之候處何月相果女房乳澤山ニ有之隣家小兒等ニも分ケ遣居申候趣依て何村八兵衛請人ニ而右何兵衛方江養子ニ遣シ度奉存候ニ付右願之通御聞濟爲成下候ハ、難有奉存候以上』何屋誰某』庄屋某』右之願相違無御座候間私共被爲下置候ハ、末々迄も龜抹無之様大切ニ養育可仕候以上』何村請人』養子親誰某、尙ほ、之に附記して『右捨子遣先ニ而病死致候節先方御斷罷出候書付へ速印致し同様

ニ御斷可奉申上候但シ病氣之節ハ不及御斷候事」とある。

尙ほ幸にも、捨子ニ關して、關係者の作成せる書類の實例が、可成り多數私の手元に存するので、今その中から徳川中期の一實例を紹介して、その實際を窺つて置き度い。扱て以下に掲ぐるは、「大阪鹽町四丁目町内記錄」中にあるもので、『天明四甲辰年二月六日夜』平野屋伊兵衛軒下捨子一件「西」鹽町四丁目」と上書せる紙袋に入れられたる、一捨子の爲めに作られたる、一聯の書類の控である。(一)『乍恐口上』鹽町四丁目平野屋伊兵衛「一私居宅軒下ニ當歲之男子捨置在之候處今夜五ツ時家内之者見付早速取入介抱仕罷在候尤身ニ疵等茂無御座丈夫ニ相見江申候依之乍恐御斷奉申上候以上」天明四辰年二月六日平野屋伊兵衛印「年寄病氣ニ付月行司平野屋嘉兵衛印」御奉行様「西御當番所江出ス」如斯御斷奉申上候處致養育置貴人有之は御斷申上候様且又明日四ツ時夜番人召連罷出候様被仰渡候事」、(二)『乍恐口上』鹽町四丁目年寄病氣ニ付月行司平野屋嘉兵衛「一町内平野屋伊兵衛軒下ニ當歲之男子昨夜五ツ時捨御座候付早速取入介抱仕御斷申上候處今日夜番人召連罷出候様被爲仰渡奉畏候依之夜番人町内丸屋吉兵衛借屋播磨屋勘助召連罷出申候付乍恐此段奉申上候以上」天明四辰年二月七日「平野屋嘉兵衛印」御奉行様「如斯西御當番所江書上候處夜番人勘助ハ別紙口上書差出候様被仰渡別紙之通奉書上候事」、(三)『乍恐口上』境町四丁目丸屋吉兵衛借屋播磨屋勘助「一昨夜町内平野屋伊兵衛軒下ニ當歲之男子捨有之候段所之者御訴申上候付私今日被召出様子御尋ニ御座候同夜私儀同町夜番ニ被相雇宵ハ繁々相廻リ候所別條も無御座五ツ時頃相廻リ候節右之仕合ニ付早速所之もの江爲相知候儀ニ御座候乍然捨子之儀ニ付兼而御觸渡茂有之候處右之通捨子仕候者有之を不存罷在候段不調法之至奉誤候此度之儀御聞濟被成下候様奉願上候以上」天明四辰年二月七日「播磨屋勘助印」家主丸屋吉兵衛印「年寄病氣ニ付月行司平野屋嘉兵衛印」御奉行様「如斯西御當番所江書上候處於御前夜番人勘助急度御叱置此後入念夜番仕候様被仰渡猶又御當番所ニ而請證文御讀聞被成勘助并家主年寄印形仕相濟候事」捨子のありし場合夜番人有責と云ふことは、當時の法令にも見ゆ一例へば「大阪市史」第三、一一七、八三一、一二七四頁等一從つて此書類は此原則の

適用例となるのである)、(四)『昨六日之夜五ツ時平野屋伊兵衛殿軒下ニ當歳之男子捨有之候付西御番所江御斷申上候處致養育置貫人有之は御斷申上候様被仰渡候間此段御知セ申置候以上二月七日行司』(此文書の見出し端書に「捨子有之丁内知セ廻狀」とある)、(五)『乍恐口上鹽町四丁目平野屋伊兵衛』一當月六日之夜私居宅軒下江當歳之男子捨置御座候ニ付同夜御斷奉申上候處養育仕置貫人有之は御斷申上候様被爲仰付奉畏候然ル處此度四天王寺領東久保町百姓正心借屋淡路屋勘兵衛請人ニ而右同斷公事町下駄屋彌七郎與申者養子ニ貫申度由申之候付相糺候處右彌七郎當月上旬出生之忝御座候得共無程死去仕女房とわニ其乳御座候間養育仕度段申之候尤右請人之家主正心儀は天王寺法用有之節は被相屋罷出候者ニ御座候勿論右彌七郎身元見届候處慥成者ニ御座候ニ付養子ニ差遣シ度乍恐右兩人召連御斷奉申上候且又右所之年寄江茂引合候處承知仕罷在候以上「天明四辰年二月晦日」平野屋伊兵衛印「年寄病氣ニ付月行司平野屋嘉兵衛印」右願之通御聞届被爲被下置候ハ、難有奉存末ニ龜抹無御座候様大切ニ養育可仕候以上「貫人下駄屋彌七郎印」請人淡路屋勘兵衛印「御奉行様」如斯西御番所江書上候處願之趣御聞届被爲成候間隨分大切ニ養育仕候様御役人杉浦兵左衛門様貫人江被仰渡相濟候事、(六)「一札」其許殿軒下ニ捨有之候當歳之男子此度我等養子ニ貫申處實正也右男子爲養育料銀貳百四拾目御添被下慥請取申候尤今日御番所様江御斷被下則私共江被爲仰渡候趣慥奉承知候隨分末ニ龜抹無之様大切ニ養育仕病氣之節は早速其許殿江相斷可申候且又勝手ニ付宅替仕候共是亦相斷可申候萬一致養育兼候共無斷外江又遣シ仕間鋪候勿論右銀子貳百四拾目之外後ニ至リ決而無心ケ間鋪儀毛頭仕間敷候若不縁ハ、養育料之銀子無相違右男子ニ相添差戻シ可申候自然彌七郎銀子不調達ニ候ハ、請人勘兵衛急度相辨可申候爲後日捨子貴請連印一札仍如件「天明四甲辰年二月晦日」四天王寺領公事町貫人下駄屋彌七郎印「右同所東久保町百姓正心借屋請人淡路屋勘兵衛印」右家主正心儀は天王寺法用有之節は被相屋罷出候者ニ而百姓致渡世居申候「鹽町四丁目平野屋伊兵衛殿」(七)「一札」一私軒下江當月六日之夜當歳之男子捨置御座候付同夜西御番所様江御斷被下私方ニ養育仕罷在候然ル處此度四天王寺領東久保町百姓正心借家淡路屋勘兵衛請人ニ而同所公事町下駄屋彌七郎

與申者方江養子ニ遣シ申處實正也萬一致養育兼候而差戻シ候儀も有之候ハ、早速御町江相斷可申候爲後日仍如件」天明四甲辰年二月晦日「平野屋伊兵衛印」年寄今宮屋傳兵衛殿、(八)「乍恐口上」四天王寺領攝州東成郡公事町下駄屋彌七郎「一鹽町四丁目平野屋伊兵衛軒下ニ去辰二月六日之夜當歳之男子捨有之候付其段御斷奉申上候然ル處四天王寺領東久保町淡路屋勘兵衛請人ニ而私方江養子ニ貫請度旨双方申合同晦日當御番所江御斷奉申上御聞届之上私江被爲下置難有奉存右捨子藤松與名附養育仕罷在候處先月下旬病氣ニ御座候付早速醫師相頼藥用介抱仕候得共段々病氣差重リ申候間双方申合乍恐此段御斷奉申上候以上」天明五年巳七月廿一日「彌七郎印」請人淡路屋勘兵衛病氣ニ付代弟善兵衛印「鹽町四丁目平野屋伊兵衛印」御奉行様「如斯西御番所江御斷申上候處養生致し遣シ候様被仰渡候事」(九)「乍恐口上」四天王寺領攝州東成郡公事町下駄屋彌七郎「一鹽町四丁目平野屋伊兵衛軒下ニ去辰二月六日之夜捨有之候男子私養子ニ貫請養育仕候處先月下旬より病氣ニ御座候付昨廿一日御斷奉申上候然ル處養生相叶不申今朝七ツ半時死去仕候間双方申合乍恐御斷奉申上候以上」天明五年巳七月廿二日「彌七郎印」年寄仁兵衛病氣ニ付代頭百姓勘四郎印「同所東久保町請人淡路屋勘兵衛病氣ニ付代弟善兵衛印」鹽町四丁目平野屋伊兵衛印「年寄病氣ニ付月行司今宮屋吉兵衛印」御奉行様「如斯西御番所江御斷申上候處見改檢使可差遣旨被仰渡候事」(十)「四天王寺領攝州東成郡公事町下駄屋彌七郎」一鹽町四丁目平野屋伊兵衛軒下ニ去辰二月六日之夜當歳之男子捨有之私養子ニ貫請度旨御願奉申上候處御聞届被成下則貫請藤松與名附養育仕罷在候之處先月下旬就病氣藥用致介抱遣候得共不相叶今朝七ツ半時病死仕候付御斷奉申上候處御見改御檢使被成下死骸被成御改候處怪鋪儀茂無之候付片付可遣旨被仰渡難有奉畏候依之一同以連印御請奉申上候以上」巳七月廿二日「彌七郎印」年寄仁兵衛病氣ニ付代頭百姓勘四郎印「同所東久保町請人淡路屋勘兵衛病氣ニ付代弟善兵衛印」鹽町四丁目平野屋伊兵衛病氣ニ付代下人清兵衛印「年寄丸屋藤兵衛西御番所江罷出候付月行司今宮屋吉兵衛印」御奉行様「御見改松田喜三右衛門様」(十一)「口上之覺」一四天王寺領攝州東成郡公事町下駄屋彌七郎養子捨子藤松與申當巳二歳ニ相成候者病氣之由ニ而先月下旬治療頼來候故早速罷越診脈仕候所病

症疴疾與相見江虫強御座候其上泄瀉強有之候ニ付調中益氣湯調合仕別ニ肥兒丸兼用ひ候得共養生不叶急變差出今朝七ツ半時比病死仕候」右之通相違無御座候以上已七月廿二日「南平野之内横町本道林貞安印」御奉行所、(十二)「札」一鹽町四丁目平野屋伊兵衛軒下ニ捨有之候當已貳歳之男子我等養子ニ貫請致養育候處病死ニ付今日西御番所江御斷申上御見改御檢使松田喜三右衛門様被成御出死骸御改之處怪敷儀茂無之片付可遣旨被仰渡候間其墓所へ葬可給候爲後日仍如件」天明五年已七月廿二日「四天王寺領公事町下駄屋彌七郎印」年寄仁兵衛印「右之通相違無之ニ付奥印如件」鹽町四丁目平野屋伊兵衛印「高田墓所」。

(二) 次に、重病の奉公人を遺棄せる事件の判決例が存する。即ち次段の第十四、第十五の兩判決例がその例であるが、之等に依つて、請人にして、重病奉公人扶助の義務(拙文「徳川時代に於ける雇傭法の研究」(三)「國家學會雜誌」四一卷九號—一〇一頁參照)に違反して重病奉公人を遺棄せる場合は、遺棄罪を構成するものであり、一方その主人も亦重病奉公人を他に移せる場合、場合により、遺棄罪を犯すに至ると云ふ定めであつたことを知り得るであらう。

第十四判決例 (御吟味物料書并御伺書控「收録」)

寛保三亥年三月「重病之者を見捨置候一件」御仕置窺「掛」松浦河内守佐々美濃守「安治川南貳丁目河内屋利兵衛借屋坂井且柳下人長兵衛重病ニ成候ニ付當月朔日請人九條嶋桔梗屋和平借屋播磨屋徳次郎同家柴屋善兵衛江引渡處翌二日安治川壹丁目ニ行倒居候由且柳承り早速引取養生いたし遺候得共翌三日之朝相果候由且柳訴出檢使差遣シ病死ニ無相違相見請人善兵衛呼出し候處當時徳次郎同家ニハ無之無宿之者ニ而右病人を主人の受取候上捨置候趣ニ相聞候ニ付召捕入牢申付一件吟味之趣左之通ニ御座候」亥三月五日入牢宿なし

柴屋善兵衛當亥五拾五歲」生所播州高砂寺町船頭柴屋五郎兵衛忤ニ而兩親共相果去戌七月當地江罷越從弟安
治川四丁目家主不存高砂屋勘右衛門方ニ三十日程同家いたし其後方ニ知ル邊の方ニ暫宛罷在右德次郎方ニ
も暫同家いたし居候得共其後德次郎方をも罷出鹽物出商いたし夜分ハ心安方を頼候而泊り定候宿ハ無之坂
井且柳下人長兵衛義ハ同國之者ニ而前方致心易候處先月廿五日頃當地江參候ニ付善兵衛請人ニ相立且柳方江
奉公ニ遣候其後長兵衛儀重病ニ相成候ニ付善兵衛江可渡旨主人且柳申聞候得共善兵衛宿なし茂同前ニ而其
日過之事ニ候得ハ得請取間敷旨斷申候得共受人之事故是非共請取候様ニ達而申ニ付致方無之且柳方ニ居合
候者ニ肩を持セ善兵衛ハ足を持鋪居を越門ト口江引出し置」其節且柳方ニ居合候安治川南貳丁目淡路屋彦
兵衛同家吉兵衛並同四丁目四桑立庵呼出し相尋候處吉兵衛ハ且柳頼候ニ付手傳セ奉公人を門ト口江出し遣
候定而善兵衛連歸候事と存直ニ罷歸立庵義ハ長兵衛を門ト口江出し候迄ハ及見候得共是亦直ニ立歸候由奉公
人を請人ニ渡候相談之義且柳善兵衛如何様ニ申談し候哉兩人共様子一切不存旨申之候書」黃紙御下ケ札
寫書」此立庵吉兵衛無構旨可申渡哉」御城代酒井雅樂頭殿御附ケ札寫書」無構旨可被申付候」長兵衛
雜物可渡與存主人ノ請取門ト口江出候處長兵衛儀這候參候哉裏口之方ニ側居候ニ付雜物相渡シ其節善兵
衛引請セ話可致答ニ候得共身貧之者ニ而致方無之ニ付其儘ニ見捨歸り其後且柳方江寄付不申旨申之候」一
善兵衛儀右之通宿なし同前之身分ニ而奉公人之義被是致セ話候者徳用ニ而茂可取ため請ニ相立萬一病氣等
ニ而主人ノ引渡候ハ、其節可見捨與兼而覺悟いたし居候故右之通側居候を其儘ニいたし置候儀與相聞江候

旨吟味仕候處後ニ至病氣等ニ而主人ハ引渡候節ハ如何可致坏と思慮仕候義ニ而ハ無之與風請人ニ相立萬一有付候ハ、主人手前ハ少々ハ世話料として銀子吳候儀も可有之哉と存付候ヘ共右之通無間病氣ニ成候故銀子等貰候儀一切無之由且亦當月二日長兵衛を且柳方江引取候節倒居候所ハ且柳居宅裏口ハ貳町程茂間有之重病之ものニ候得ハ自分として其所江可參様無之候且柳方裏口ニ倒居候を見捨歸候與申ハ偽ニ而持出捨候又ニ可有之旨重々吟味仕候處持出候義ニ而ハ無之且柳居宅裏口之方ニ倒居候得共善兵衛儀身貧成者ニ候得ハ無致方其儘ニ見捨歸候由無程相果候程之病人を右之通之仕方其已後主人且柳方江寄り付不申段畢竟持出捨候茂同前ニ候旨吟味詰候處此段無申披旨申之候」黃紙御下ケ札寫(朱書)「此者宿なし同前ニ而奉公人之受判仕其上右奉公人長兵衛重病ニ付主人ハ相渡候節主人之門ト先ヘ連レ出倒候儘ニ而差置候義捨候同事之仕方重々不届ニ付極メ候居所有之請人ニ候ヘハ死罪御仕置ニ相當リ候然共元來宿なし同前ニ而請ニ可立者ニ無之居所之義不相糺請人ニ取候段ハ主人之不調法ニ候畢竟右躰之身分ニ而請判いたし候義ハ判賃をも主人方ハ可差出哉と存其上同國之好身を以請ニ相立不埒之筋共不辨後々之義迄ハ不心付極メ候宿もなく差當可引取方無之ニ付無是非倒居候儘ニ差置候趣ニ相聞ヘ候乍去可引取方無之候ハ、主人江達而其斷を申其上ニも得心不致候ハ、御番所ヘ成リ共可願事ニ候處無其儀右之仕方旁不届之至ニ候併長兵衛共其所ニ而相果候ニ而も無之故遠嶋可申付哉」御城代御附ケ札寫(朱書)「遠嶋可被申付候」所預ケ安治川南貳丁目河内屋利兵衛借屋坂井且柳富亥三拾五歳」右且柳下人長兵衛奉公ニ召抱候節之儀并長兵衛重病ニ付當月朔日之夜請人江引渡候仕

方柴屋善兵衛申口之通ニ御座候翌二日長兵衛義安治川壹丁目ニ倒居候旨致風聞候ニ付早速引取致養生遣候處翌三日之朝相果候由右善兵衛を奉公人之請人ニ取候節德次郎同家與極り候者にても無之宿なしも同前ニ候處居所茂とくと不糺請人ニ取奉公人召抱其已後重病ニ成り候を受人へ相渡候節善兵衛義身貧ニ而右躰之病人請取候而ハ可致難儀事を乍存夜中ニ可渡と申出シ一切步行難成者を入茂不差添善兵衛壹人ニ渡シ遣候段旁不行届取計不埒之仕方ニ候旨吟味仕候處此段無申披旨申之候」黃紙御下ヶ札寫(朱書)」此者儀長兵衛を召抱候節善兵衛請判ニ而差置候得は請人之居所を茂相糺請判取可申之所且柳宅ニ而請狀ニ印形取其上長兵衛重病ニ付請人江可渡與申聞候處身貧ニ而難受取候由申候へハ其節ニ至り候而も居所相糺候へハ無宿同前之譯可相知處居所も不相糺歩行も不相成重病之者を居合候者ニ手博セ持出させ請人壹人ニ而取扱難成義を乍存人をも不差添相渡候が事發候而捨候同前之義出來候段重と不埒ニ付追放ニも相伺可申者ニ候へ共長兵衛倒居段追及承引取養生いたし遣候ニ付一統輕く戸メ可申付哉」御城代御附札寫(朱書)」戸メ可被申付候」右御仕置黃紙附ヶ札を以奉伺候以上」亥三月」掛り松浦河内守佐々美濃守」右掛り役人田中宇左衛門生駒友之進(朱書)

第十五判決例

〔諸御吟味落着書留〕收録〕

辰○延
享五六月廿二日吟味同九月六日落着」一重病人を捨置候儀」山家町森屋七郎左衛門借屋天目屋又兵衛櫻町年寄播磨屋藤右衛門」右藤右衛門下人物吉儀重病ニ而當六月廿一日道頓堀吉左衛門町ニ行倒居主人藤右大坂奉行所刑事判決例十六題

衛門并請人又兵衛江此段しらせ吳候様惣吉申ニ付早速當人江相達候得共不引取旨吉左衛門町年寄町人共訴出(原出の字重)ニ付藤右衛門又兵衛呼出シ様子相尋候處惣吉儀ハ主人ガ請人江渡遣候を捨置趣ニ相聞ニ付又兵衛者入牢藤右衛門ハ所預ケニ申付惣吉儀者重病故其儘吉左衛門町ニ而養生爲致置候處翌廿二日相果候ニ付死骸ハ其節片付申渡一件遂吟味酒井讃岐守殿江相親候上左之通落着申渡ス一又兵衛儀一旦請人ニ立候奉公人物吉重病ニ而行倒居候を捨置罷歸右奉公人相果候上者死罪ニ茂可申付處惣吉儀元來主人藤右衛門方致不奉公其上病氣ニ而當分又兵衛方ニ指置候相對を以當六月五日引取候處同夜家出致し則主人方ガ奉行所江欠落届テ茂申出日數立候上右之通行倒居候儀ニ而惣吉儀最初道頓堀九郎右衛門町ニ行倒居候節者所ガ又兵衛方江しらせ來早速罷越引取候處身貧之又兵衛厄介ニ成候儀氣之毒ニ候乞食ニ而茂可致候間見放吳候得與惣吉申之ニ付不便與者乍存又兵衛身貧故仕方無之任申捨置罷歸候儀ニ而一旦見捨候上ハ最早引取不及儀與心得違吉左衛門町江者不罷越由申之候然共其身貧鋪引請候儀難成候ハ主人方江參リ幾重ニ茂相歎惣吉快氣迄之介抱者是非致シ可遣處其世話茂不致捨置候段不届至極ニ付遠嶋申付ル一藤右衛門儀先達而欠落致届置候下人物吉儀病氣ニ而行倒居候趣乍承不引取不致家出候以前請人又兵衛江渡置候儀を申立候得共左候ハ、請人手前江早ニ引取致介抱遣候得與心をも付ケ何レニ茂惣吉居所相知レ候斷者可申出筈之處無其儀段年寄役を茂勤候者ニハ不似仕方不届ニ付年寄役取放し所預テ指免候旨申渡候更ニ口書掛リ田中宇左衛門八田五郎左衛門

町人帶刀の罪

大坂にも、早くより町人帶刀禁止の法令が發せられて居る。例へば「慶安元年の天和二年迄御法度書留帳」所收孫太夫、丹波署名の慶安元年子四月五日の法令に、『一町人旅之外大坂町中ニ而刀脇指差申間敷候并召使之若者草履取大脇指差候儀此已前度々申付候見合ニ捕籠舍可申付事』とあるはその早期のものであり、而してその後屢々繰返へされて居る（例へば「大阪市史」第三、六六、七八、）のである。

しかし町人帶刀の罪を處斷せる恰好の實例は、今舉げることが出来ないのである。只次の判例は、こゝに參考すべきものであらう。

第十六判決例（「諸吟味窺書寫」天明六丙午年の分收錄）

町人の身分ニ而鐵刀を持及嵩高候者」御仕置窺書」書面之通御仕置可申付旨御附札を以被仰渡奉畏候」午十二月六日」小田切土佐守」午六月廿三日入牢北堀江二丁目河内屋新兵衛支配かしや上田屋利助午四拾壹歳」右之者御仕置黃紙下ケ札を以奉窺候以上」午八月」小田切土佐守」御城代阿部能登守殿御附札 午十一月十二日下ル同十二日六日落着」此利助儀伺之通鐵刀取上ケ大坂三郷拂可被申付候」此利助儀町目附同心雨具持ニ被雇參候砌心得違鐵刀用意いたし懷中ニ隱置候共途中ケ暇受候上ハ猶更相愼罷歸リ可申候處無其儀座摩祭禮群集之場所ニ而鐵刀を振廻し及嵩高候段不届ニ付鐵刀取上ケ大坂三郷拂可申付候哉

扱て、町人帶刀に關する「公事方御定書」の規定は、その下卷第九十四條『帶刀致候百姓町人御仕置之事』の條の、『從前々之例』一自分と帶刀いたし罷在候百姓町人」刀脇差共ニ取上輕追放』（徳川禁令考後聚第四帙二九六頁）であるが、本規定は、大坂地方にも行はれたものと考へて、差支へないと思はれるのである。右の天明六年の鐵刀僭用者處斷例（『鐵刀取上大坂三郷拂』）に依つて、かく推定するものである。